

《シンポジウム》

2016 年度シンポジウム司会報告

司会 河野 一 典

まず前述の「企画の趣旨」について、もう少し説明を加えたい。近年の本学会発表では東方と西方の神学者・哲学者の発表が古代から近世に至るまでちりばめられて論じられている。その多様性を喜びながらも聴衆の一人としてあえて大雑把な疑問を言わせていただければ、東方と西方とをいわば複眼的にみられる視点とは何かということである。東方と西方の「比較思想」という企画意図に即して言えば、そもそも二つのものを比較するためには二つの意味で必須の事項が存する。一つは両者を比較するうえでの共通の基盤が必要であること、もう一つは同じ基盤を持ちながらどこで分岐し異なる固有の発展をしているのかを明示するということである。

本シンポジウムでは両者のもつ共通の基盤として「御言の受肉」という神秘に着目し、それをどのように受けとめ根本的な探求の対象としていったのか、いわゆる東方の「神化思想」と西方の「神秘思想」の思想展開を取り上げることとした。

2016 年度、まず久松英二氏は「シンポジウム連動報告」として、エイレナイオスからアレクサンドレイア派の教父およびカパドキア教父に至るまでの神化思想の原型を、ギリシア哲学（プラトンやストア派）の受容を含め俯瞰した。そしてカパドキア教父以来「神化」論が姿を消し、擬ディオニュシオスによって神化思想はこの世における神認識の問題に発展し、マクシモスやパラマスに受け継がれると論じた。それによって東方と西方の共通の水源としての擬ディオニュシオスの重要性が明示され、本シンポジウムの導入として大きな示唆と問題提起を与えられた。

袴田渉氏は神化思想の主題に即して、擬ディオニュシオスの神化思想が展開する時代背景を論じられた後、『神名論』における「神の名づけ」が

もつ肯定神学の側面に焦点を当てて論じた。すなわち神の実体と力（エネルギー）を区別することによって、神と類似する人間の魂の内で経験された神の力を想起する祈りこそが擬ディオニュシオス神学の真髄であることを解明された。このことによって東方の神化思想が発展・成熟していく方向性の契機として、擬ディオニュシオスの「神名」がもつ役割が明解にされたと思われる。それでは同じく水源としての擬ディオニュシオス思想が西方の神秘思想の水脈にどのような役割をはたしたのか。次年度のシンポジウムへの期待がますます大きくなった。

谷隆一郎氏は東方神学の伝統である人間における神的エネルギーとの出会い（根源的経験）を、自由意志論（われわれ誰もが経験する意志の分裂と罪の問題）をとおして読み解かれた。そこでは証聖者マクシモスに依拠しつつ、東方神学の人間観・徳および身体論、ひいては神の創造、愛（恩恵）、キリストの十字架と復活まで透徹する仕方、「御言の受肉」の意味について論じられた。おそらくは谷氏自身の実存的主題とも思われるが、神化の道行きにおいて「善く意志し、善きわざを為す」（意志的聴従）ことの可能根拠として受肉および復活の意味を捉え直された。東方神学の人間観が明察され、西方との接点をも見出すことができたのは筆者にとどまらないと思われる。

大森正樹氏は東方の神化思想が理論的に結実した後期ビザンティンのグレゴリオス・パラマスの思想について論じられた。神の本質と働き（エネルギー）との区別は一貫して継承されているが、発表では「タボル山でのキリストからの光」をめぐるバルラームとの論争を取り上げることによって、東方神学の「神化」が孕む知性認識をめぐる理論的問題を浮き彫りにされた。すなわちバルラームは先の光を感性的・被造的なものと解し、観想における知性的認識の優位を説くのである。それに対しパラマスは「エンヒュポスタトン」という概念によって神化のエネルギーがそれを受け取る器としての聖人に顕現したと解する。

このように三者の神化思想をめぐる提題によって、東方神学における擬ディオニュシオスの否定神学の解釈および自己否定や脱自の理論的構造を簡明にできたと思われる。フロアからの質疑も活発に行われた。特に西方の研究者たちから率直な質問が多く出された。たとえば「擬ディオニュシウスにおいて精神が神の力に遭遇するという経験が神名の根拠とすることを理解することが難しい」、「マクシモスの自由意志・意志的聴従はアンセルムスの選択の自由、意志（voluntas）論と異なるのか」、「パラマスにおけ

るこの世の神化（神のエネルギーの顕現）が、復活後は至福直観（神の本質を見ること）に到達することになるのか」「神の本質と力・働き（エネルギー）との区別についてももっと説明してほしい」等々。したがって東方と西方を繋ぐ架け橋（比較思想）の議論の場を提供するという本シンポジウムの企画意図は一定の成果を収めることができたと思われる。これを契機に、次年度のテーマ「西方神秘思想」においてもますます闊達に、「御言の受肉」をめぐる神論・人間論のさらに異なる本質的な議論の展開を見ると確信している。

《連動報告》

ギリシア教父における神化思想

久松 英二

はじめに

通常「神化」と訳される「テオーシス」(Θεωσις) という概念は『ペトロの手紙二』1章4節にある「神の性質にあずかる者となる」という言葉を、新約聖書における直接的な根拠としている。ごく一般的に、これは「神に似たものになる」あるいは「神と一つになる」ということであるが¹⁾、これは以下に見るように、様々な側面を含み持つ包括概念である。

神化は東方キリスト教の救済思想のキーワードであるが、これは初代のギリシア教父に遡る²⁾。神化思想を本格的に論じ始めたのは小アジア伝承のエイレナイオス(130頃-202)であり、その後アレクサンドレイア派の

1) 「神に似たものになる」ないし「神と一つになる」という表象は、擬ディオニュシオスによるΘεωσιςの「定義」に基づく。下記注3参照。

2) ギリシア教父の神化思想についてはJules Gross, *La divinisation du chrétien d'après les pères grecs*, Paris, 1938が最も基本的な文献である。